堀越芝山遺跡

「大胡町総合運動公園」建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

はじめに

「大胡町総合運動公園」の建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書『堀越芝山遺跡』をお届けいたします。

発掘調査によって、太古の昔縄文の人々が、堀越芝山を生活の基盤としていたこと、また古墳時代において、人生を終えるにあたりその魂を鎮める場所としてこの地が選ばれたことが確認されました。悠久の時を経て今ここに、多くの大胡町民が希求する総合運動公園が造営されようとしています。

文化の創造が、連綿として培われた先人たちの創造のうえに成り立つものであるという事に思いを馳せる時、発掘調査によって知見された遺跡が、変ぼうする現代社会の状況について、我々に問いかけるものは図り知れないものがあります。

本報告書が多くの方々にそのような悠久の時への思いを新たにする一助になることを祈念するとともに、調査にご協力いただきました多くの方々、調査にあたられたみなさまに、深く感謝の意を表し、はじめの言葉といたします。

平成8年3月

勢多郡大胡町教育委員会
教育長　剱持　平三郎

例　言

1．本書は、大胡町総合運動公園の建設に伴い事前に発掘調査された大胡町大字堀越字芝山に所在する遺跡の発掘調査報告書である。

2．遺跡の名称は、大字名小字名を併記し堀越芝山遺跡と呼称した。

3．発掘調査は、大胡町教育委員会が直営で実施したものである。

4．本書の作成にあたっては、編集・執筆は山下・藤坂があたった。

5．発掘調査によって出土した遺物は、大胡町教育委員会文化財事務所に付設する収蔵棟で管理・収蔵されている。

6．発掘調査の実施および本書を作成するについて、下記の機関・諸氏に御指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

群馬県教育委員会文化財保護課　群馬県埋蔵文化財調査事業団　群馬県埋蔵文化財調査センター
技研測量設計株式会社　須賀工業株式会社　勢多郡社教部会文化財分会の諸氏　谷藤保彦　前原　豊

7．発掘調査作業員及び整理作業員は次のとおりである。（敬称略）

五十嵐文江　石井　よね　井上美代子　江原　喜美　大原きみ子　小沢チヅエ
下山　敏　菅田　ツル　鈴木久美子　関谷　清治　勅使河原幸枝　登坂うた子
萩原　秀子　福島　逸司　山下　雅江　横沢　和代

凡　例

1．本書挿図の縮尺は次のとおりである

全体図　1：300　住居址　1：60　炉址　1：30　土坑・集石遺構　1：40　土器　1：3,1：4

石器　1：2,1：3,1：8　古墳平面図　1：180　古墳断面図　1：120　主体部平・断面図　1：80

2．遺構図中に記した断面基準線は標高である。

3．遺構図中に示したN方位は、座標北である。

4．第2図は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図「前橋」を加筆し、使用した。

5．第1図は、大胡町役場発行2,500分の1現形図を加筆し、使用した。

目　次

はじめに

例言

凡例

目次

挿図目次

図版目次

抄録

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯と調査の経過 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 1

第1節　遺跡の位置 …… 1

第2節　周辺の遺跡 …… 2

第Ⅲ章　調査の方法及び遺跡の層序 …… 2

第1節　調査の方法 …… 2

第2節　遺跡の層序 …… 5

第Ⅳ章　縄文時代の遺構と遺物 …… 5

第1節　第1号住居址 …… 5

第2節　第2号住居址 …… 7

第3節　第3号住居址 …… 13

第4節　土坑及び集石遺構 …… 15

第5節　遺構外出土縄文時代遺物 …… 18

第Ⅴ章　古墳時代の遺構 …… 18

第1節　芝山古墳 …… 18

第Ⅵ章　調査のまとめ …… 21

挿図目次

第１図　遺跡周辺現況図 ……1
第２図　周辺の遺跡 ……2
第３図　調査区全体図……3～4
第４図　基本土層図 ……5
第５図　第１号住居址平・断面図及び出土遺物（土器） ……6
第６図　第１号住居址出土遺物（石器） ……7
第７図　第２号住居址平・断面図及び出土遺物（土器） ……8
第８図　第２号住居址出土遺物（土器・石器） ……9
第９図　第２号住居址出土遺物（石器）……10
第10図　第２号住居址出土遺物（石器）……11
第11図　第３号住居址平・断面図及び出土遺物（土器）……12
第12図　第３号住居址出土遺物（土器・石器）……13
第13図　第３号住居址出土遺物（石器）……14
第14図　土坑・集石遺構平・断面図及び出土遺物……16
第15図　遺構外出土縄文時代遺物……17
第16図　芝山古墳平・断面図……19
第17図　芝山古墳主体部平・断面図……20

図版目版

ＰＬ－１　調査区俯瞰（南東から）、調査区全景（真上から）
ＰＬ－２　第１号住居址、第１号住居址遺物出土状況、第２号住居址
ＰＬ－３　第２号住居址炉、第２号住居址遺物出土状況、第３号住居址
ＰＬ－４　第３号住居址炉、第３号住居址遺物出土状況、第１～３号土坑、第１号集石遺構
ＰＬ－５　芝山古墳俯瞰（南から）、芝山古墳全景（真上から）
ＰＬ－６　芝山古墳主体部石組状況

抄　録

フリガナ	ホリコシシバヤマイセキ
書名	堀越芝山遺跡
副書名	「大胡町総合運動公園」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	山下歳信・藤坂和延
編集機関	大胡町教育委員会／〒371-02 群馬県勢多郡大胡町大字堀越1115番地
発行機関	大胡町教育委員会／〒371-02 群馬県勢多郡大胡町大字堀越1115番地
発行年月日	西暦1996年3月29日

所収遺跡名（フリガナ）	所在地（フリガナ）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
堀越芝山遺跡（ホリコシシバヤマイセキ）	大胡町 大字堀越（ホリコシ） 字芝山（シバヤマ）472-2，473-3			36度 25分 44秒	139度 8分 56秒	1995 0107 ～ 0317	2300 m²	総合運動 公園建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
堀越芝山遺跡	集落	縄文時代	住居址	3軒	縄文土器・石器	
			土坑	3基	縄文土器	
			集石遺構	1基		
	墳墓	古墳時代	横穴式古墳	1基		

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯と調査の経過

堀越芝山遺跡の発見及び発掘の契機となったのは、大胡町が計画する総合運動公園の建設事業である。事業は総合的に計画されており、計画の変更が難しい状況にあることから、発掘調査による記録保存で対処する事となった。

本調査は平成７年１月７日からの土木重機の投入によって開始され、２月15日から３月17日まで作業員による現地発掘調査を実施。４月11日から平成７年５月31日まで整理事業を実施。本書の刊行及び出土遺物の整理・保管・記録資料の整理を実施し、本遺跡に係わる事業のすべては完了した。

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の位置

本遺跡は、大胡町大字堀越字芝山472-2,473-3に所在し、上毛電鉄大胡駅の北東約2.3kmに当たる。

遺跡地は、尾引沼を谷頭として南方に続く開析谷を東方に望む洪積台地上に位置する。遺跡を載せる台地は遺跡地周辺で谷側に弧状に張り出す。遺跡の標高は、北西部で225.8mを測り、南東に向かって緩やかに傾斜する。東部の開析谷との高低差は約1.3mを測る。

第１図　遺跡周辺現況図

第２節　周辺の遺跡

本遺跡の周辺において周知・確認された遺跡の密度は濃くないものの、縄文時代中期の甲諏訪遺跡が北東約１㎞に、縄文時代後期の西一丁田遺跡が同じく北東約0.5㎞に、平安時代の製鉄遺構を検出した乙西尾引遺跡が北0.8㎞にそれぞれ所在する。同一台地の遺跡としては、南南西約0.2㎞隔てて縄文時代前期・平安時代の丁二本松遺跡を始めとして横沢古墳群を構成する古墳の支群が拡がる。

第Ⅲ章　調査の方法及び遺跡の層序

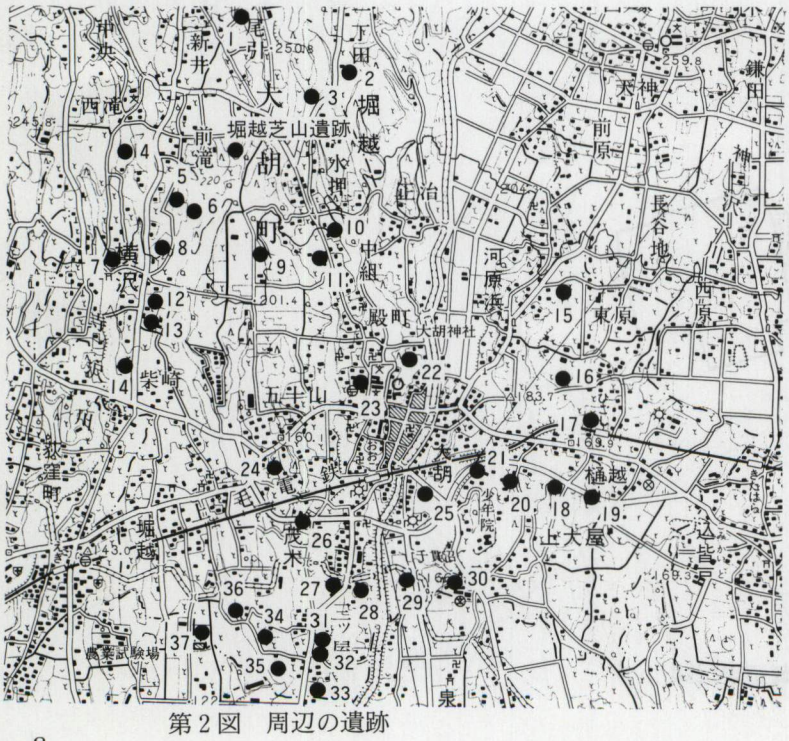
第１節　調査の方法

調査にあたっては、国家座標Ⅸ系（Ｘ＝47720、Ｙ＝－61460）を基準とする10×10ｍのグリッドを設定した。グリッド名は、南北方向に南からＡ～Ｇの７区を、東西方向に西から０～６の７区を設定し、南西コーナーの杭をもって呼称した。したがって、グリッド名は（大文字アルファベット）－（Ｙ軸上の算用数字）、Ａ－４Ｇのように表現した。

調査は、表土除去後ジョレンがけにより遺構検出・プラン確認を図り、土層確認用のベルトを設定し各遺構の調査を実施した。

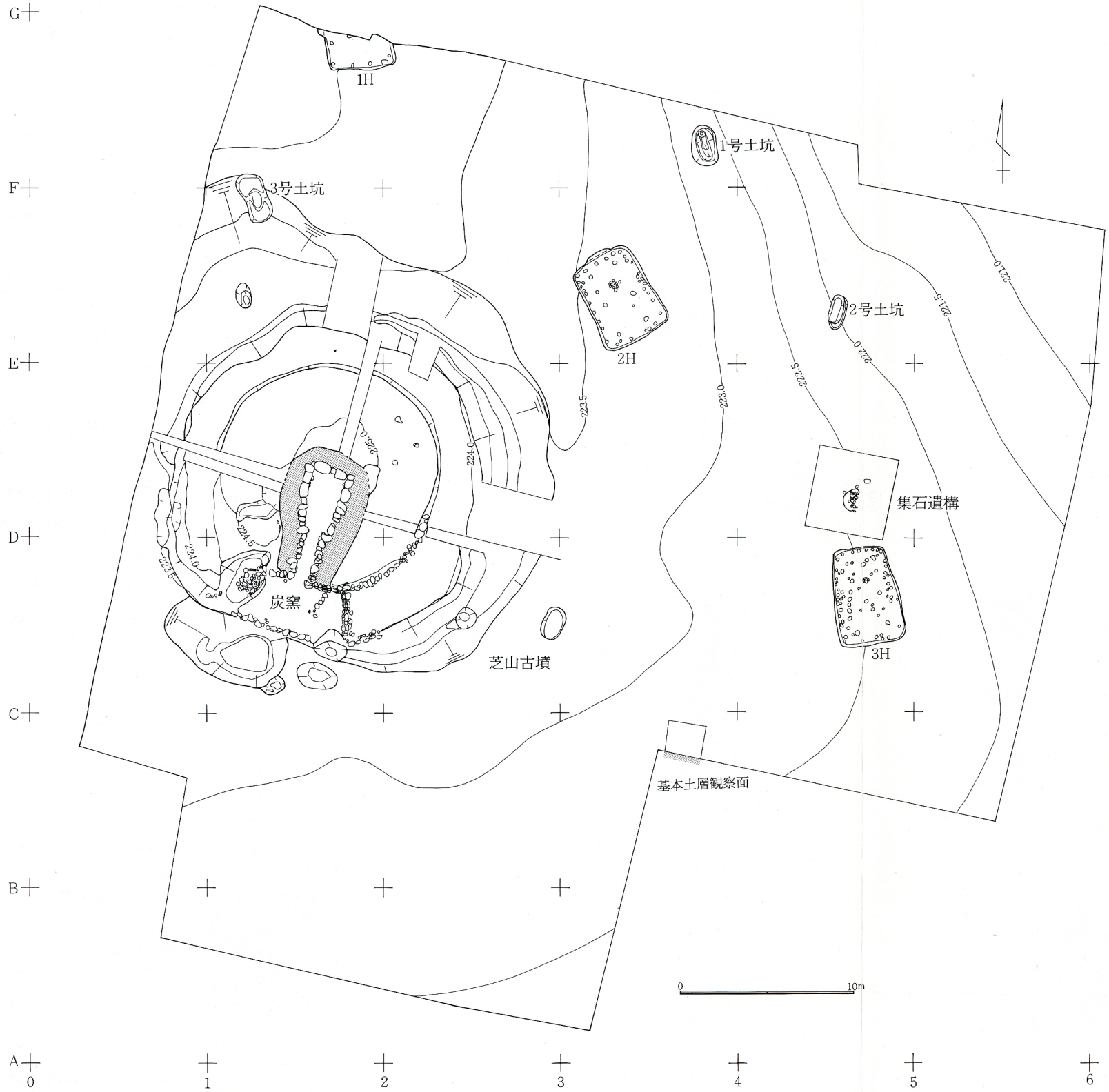
遺跡の記録図面は、遺構図面がＳ＝１：20を基本として、必要に応じＳ＝１：10の詳細図で、全体図にていてはＳ＝１：200で記録した。また、古墳の全体図及び主体部の展開図は調査の迅速化から遺構完掘後の空中写真撮影の実施に併せて写真実測によりＳ＝１：40で記録した。

遺構の記録写真は、35㎜の白黒フィルム及びカラーリバーサルフィルムを用い逐次撮影を実施した。また、バルーン（気球）により６×６の白黒フィルム及びカラーリバーサルフィルムを用い航空写真撮影を全遺構の完掘後実施した。



1．乙西尾引遺跡　2．甲諏訪遺跡
3．西一丁田遺跡　4．新屋敷遺跡
5．宇持遺跡　6．丁二本松遺跡
7．横沢城址　8．向田遺跡
9．新畑遺跡　10．乙関替戸遺跡
11．中道遺跡　12．向山遺跡
13．大胡町35号墳　14．柴崎遺跡
15．日光道東遺跡　16．浅見遺跡
17．丁田城（稲垣屋敷）
18・19．上大屋・樋越地区遺跡群
20．稲荷塚遺跡　21．八ケ峰遺跡
22．大胡城跡　23．殿町遺跡
24．堀越古墳　25．中宮関遺跡
26．天神風呂遺跡　27．西小路遺跡
28．上ノ山遺跡　29．下宮関遺跡
30．前橋東商業高校遺跡　31．小林遺跡
32．山神遺跡　33．大畑遺跡
34・35．稲荷窪遺跡　36．梅沢遺跡
37．足軽町遺跡

第２図　周辺の遺跡


G
F
E
D
C
B
A
0
1
2
3
4
5
6
1H
3号土坑
1号土坑
2号土坑
2H
3H
集石遺構
炭窯
芝山古墳
基本土層観察面
221.0
221.5
222.0
222.5
223.0
223.5
224.0
224.5
225.0
0
10m

第３図　調査区全体図

第２節　遺跡の層序

本遺跡における基本土層を第４図に示した。

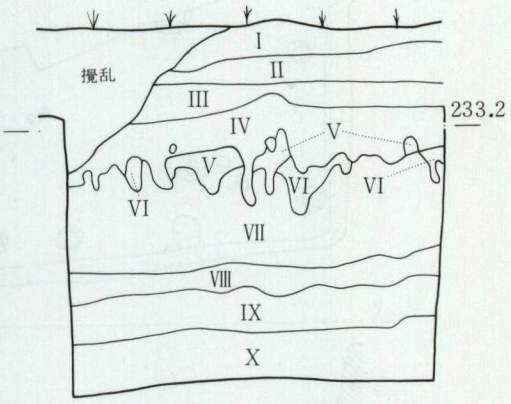
第Ⅰ層　暗褐色土　砂質で黄色軽石を混入する耕作土。

第Ⅱ層　黒褐色土　締まり強い。黄色軽石を均質混入。

第Ⅲ層　暗褐色土　Ⅱ～Ⅳへの漸移層。上部で黄色軽石点在。縄文時代の遺構の確認面は本層を除去した面である。

第Ⅳ層　鈍い黄褐色土　灰白色軽石点在。ややソフトなローム質土。

第Ⅴ層　鈍い黄褐色土　Ⅳ層に酷似する層。Ⅳ層よりハードなローム質土。黄色軽石混入。Ⅳ層より明るい。



第４図　基本土層図

第Ⅵ層　鈍い黄褐色土　Ⅴ層に酷似する層。Ⅴ層よりさらに明るくハードなローム質土。

第Ⅶ層　黄褐色土　締まりが非常に強い。白色軽石・黄色軽石を均質に混入。炭化物粒子点在。

第Ⅷ層　黄褐色土　締まりが非常に強い。砂質でざらつく。黄色軽石混入。炭化物粒子点在。

第Ⅸ層　鈍い黄褐色土　締まり非常に強い。As―Bp混入。

第Ⅹ層　鈍い黄褐色土　締まり粘性ともに非常に強い。灰白色灰（Hr―HA）混入。

第Ⅳ章　縄文時代の遺構と遺物

第１節　第１号住居址

遺構（第５図、ＰＬ－２）

本住居址は、調査区の最北部（Ｆ－１，２Ｇ）に位置する。なお、北半部は調査未実施である。Ⅱ層に酷似する黒褐色黒ボク土により埋設されていた。

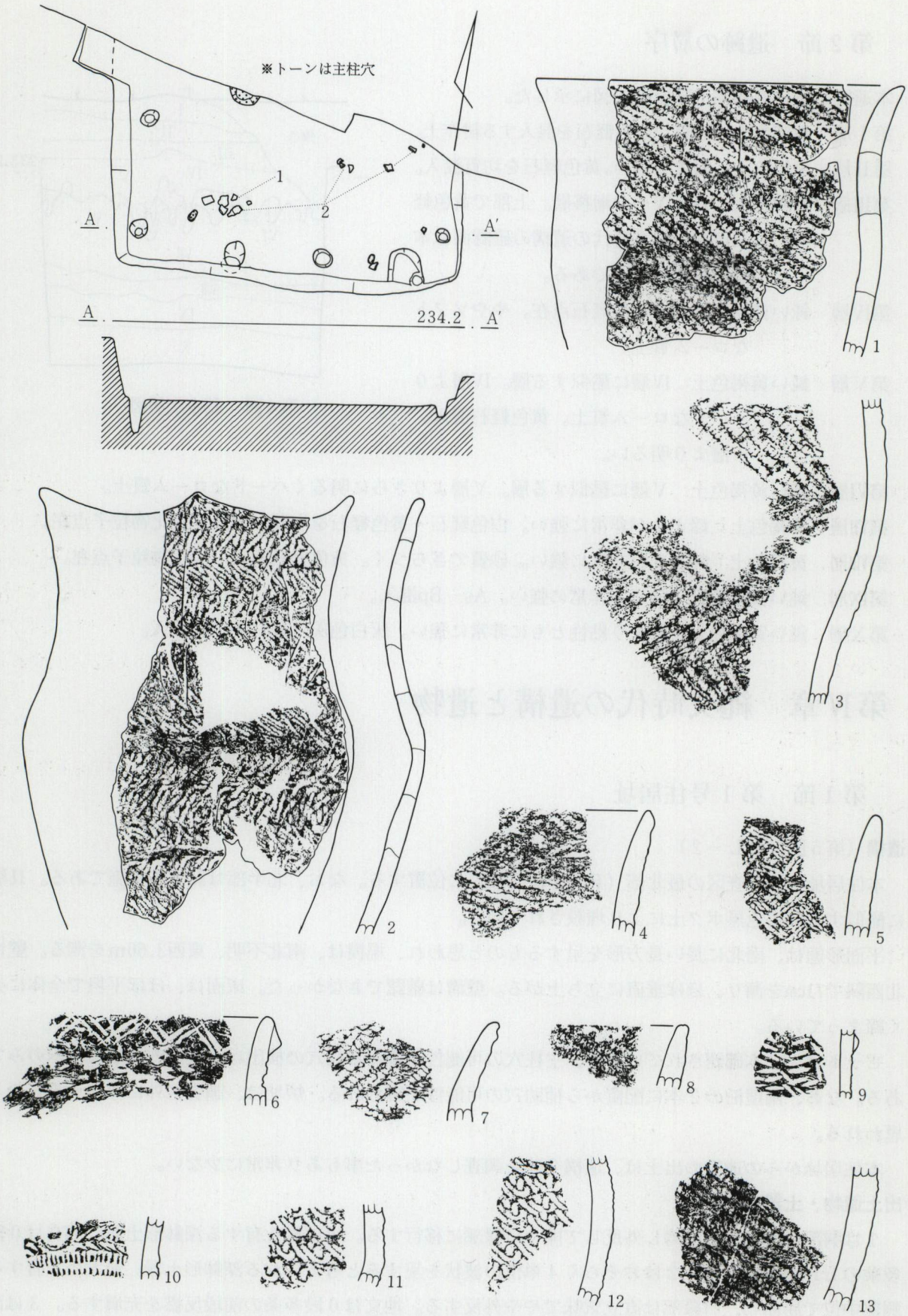
平面形態は、南北に長い長方形を呈するものと思われ、規模は、南北不明、東西3.60mを測る。壁は北西隅で71cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦で全体に良く締まっている。

ピットは、７本確認されているが、主柱穴の可能性が窺える柱穴の検出は調査区内北端の１本のみである。なお、南壁沿の２本に配置から補助穴の可能性が窺われる。炉址は、調査区外に存在するものと思われる。

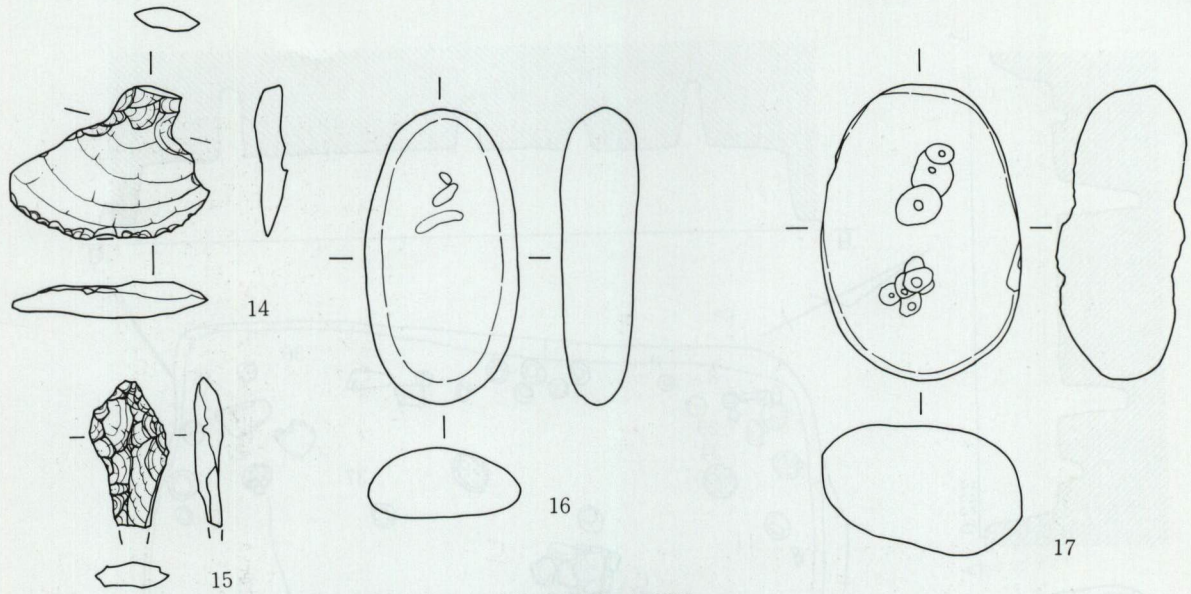
本住居址からの遺物の出土は、遺構全体を調査しなかった事もあり非常に少ない。

出土遺物・土器（第５図）

１は胴部上半でやや内湾し外反して開く口縁部に移行する。平口縁を有する深鉢形土器。地文は０段多条のＬＲを充填する。２はおそらく４単位の波状を呈すると考えられる深鉢形土器。最大径を有する胴部中位で屈曲し、口縁部は直立気味でやや外反する。地文は０段多条の前段反撚を充填する。３は直立気味にやや外反する下半より内湾する胴部片。地文は０段多条のＬＲ・ＲＬを羽状に充填する。４～８



第５図　第１号住居址平・断面図及び出土遺物（土器）



第６図　第１号住居址出土遺物（石器）

は口縁部片。４はＲＬを施す。５は口縁部片で施文は回転絡条体の一種と考えられる。６は有段の肥厚口縁を呈し多栽竹管具により口縁部文様帯に山形文、頸部文様帯に刺切文を横位に施す。７は波状を呈すると考えられる口縁部片でＬＲを充塡する。８は口唇部まで０段多条のＬＲを充塡する口縁部片。９は瘤状貼付文が見られ、八の字状に刺切文を充塡する。10は文様帯を区画する刻み目をもつ細隆帯が巡り、上部に刻み細隆帯による蕨手文と考える文様を施し、撚糸圧痕文（２本１組によるＬとＲ）、刺切文、円形竹管文を併せ施文する。11と12は同一個体と考えられる胴部片で２条による結節回転を充塡する。13はＬＲを充塡する胴部片。

出土遺物・石器（第６図）

石器は、横長の石匙１点・錐部を欠く石錐１点・敲打痕を有する磨石１点・敲打痕を有する凹石１点を図示した。

第２節　第２号住居址

遺構（第７図、ＰＬ－２、３）

本住居址は、調査区中央やや北より（Ｅ－３Ｇ）に位置する。第１号住居址同様Ⅱ層に酷似する黒褐色黒ボク土により埋設されていた。

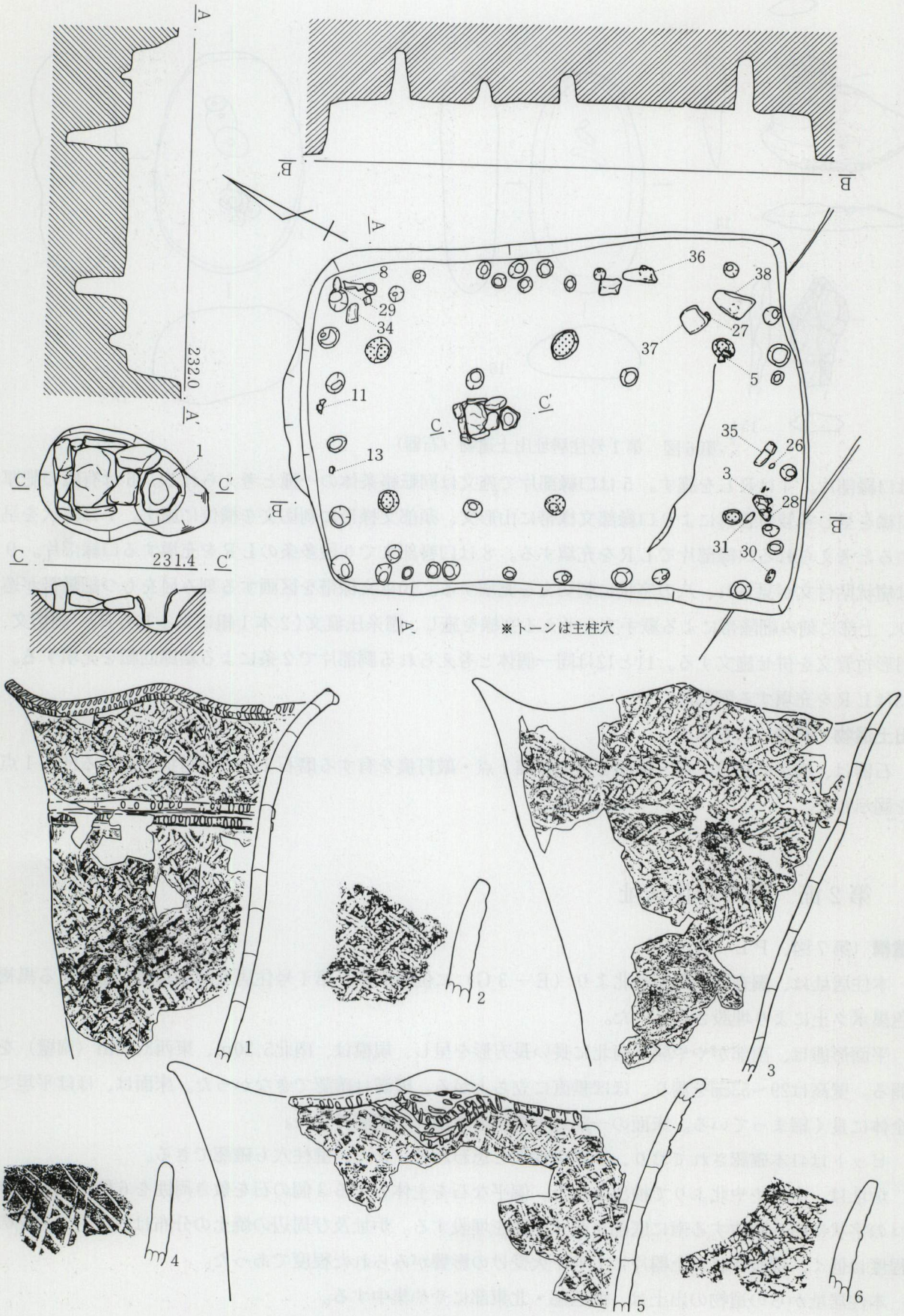
平面形態は、南部がやや開く南北に長い長方形を呈し、規模は、南北5.30m、東西3.90m（南壁）を測る。壁高は29～53cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦で全体に良く締まっている。床面の一部に小規模の地割れが確認できた。

ピットは41本確認されており、６本主柱穴と思われる。また、壁柱穴も確認できる。

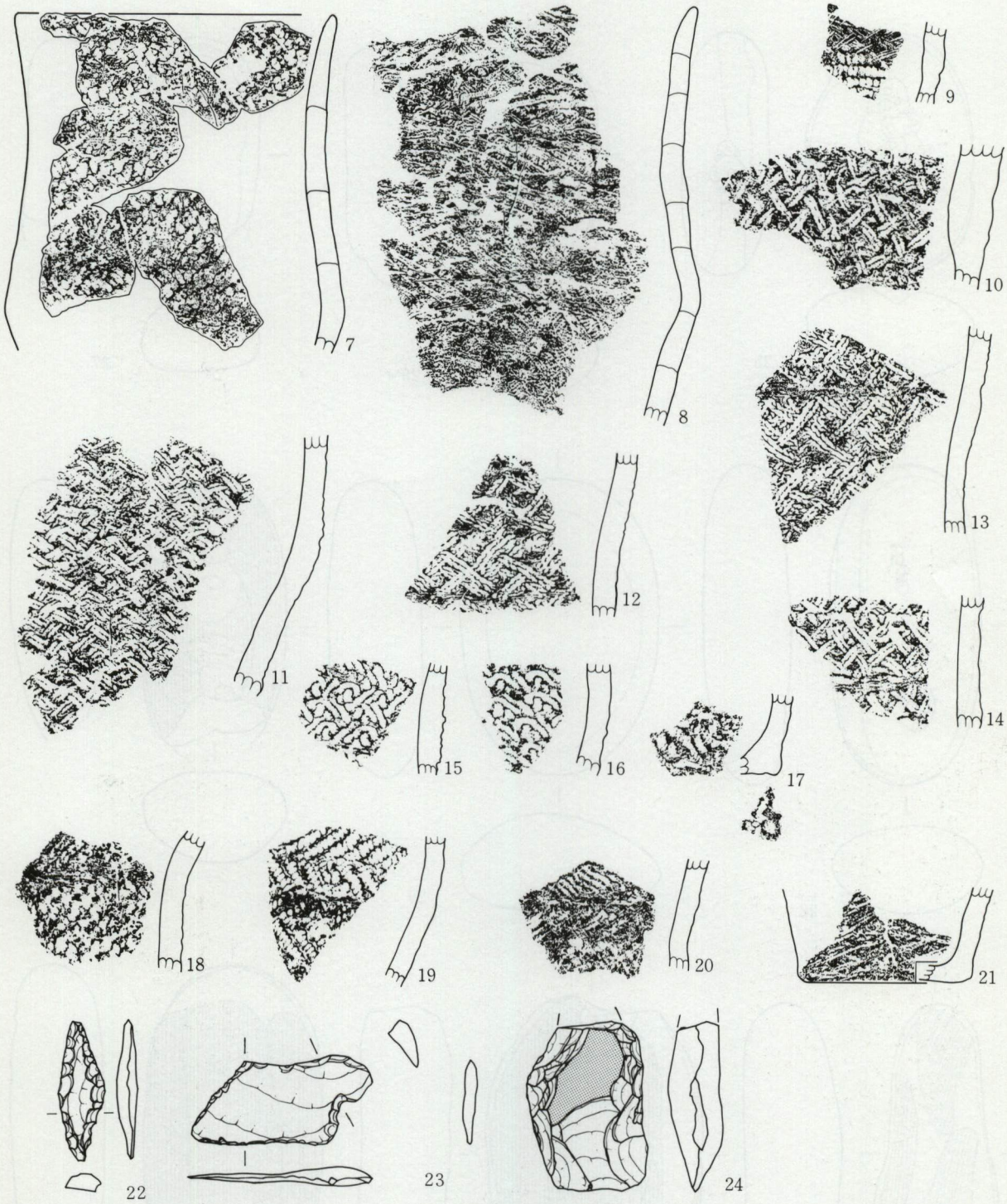
炉址は、中央やや北よりで検出された。偏平な石を主体とする３個の石を敷き周囲を６個の石によりコの字状に組み開放する南に底部を欠く土器を埋設する。炉址及び周辺の焼土の分布は散在的で被熱の程度は低く、埋設された土器片にも若干火受けの影響がみられた程度であった。

本住居址からの遺物の出土は、南西部・北東部にやや集中する。

出土遺物・土器（第７、８図）

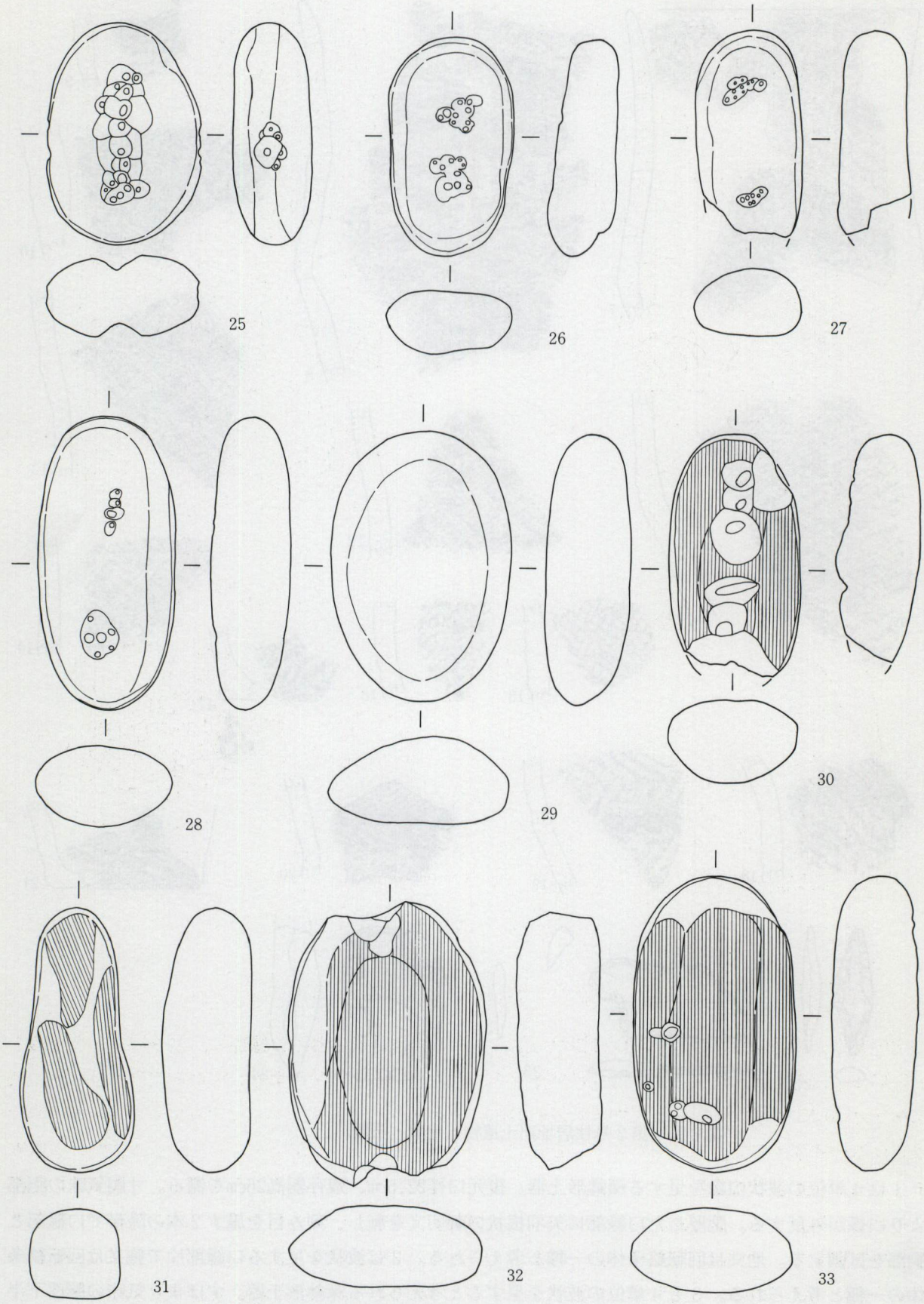


第７図　第２号住居址平・断面図及び出土遺物（土器）

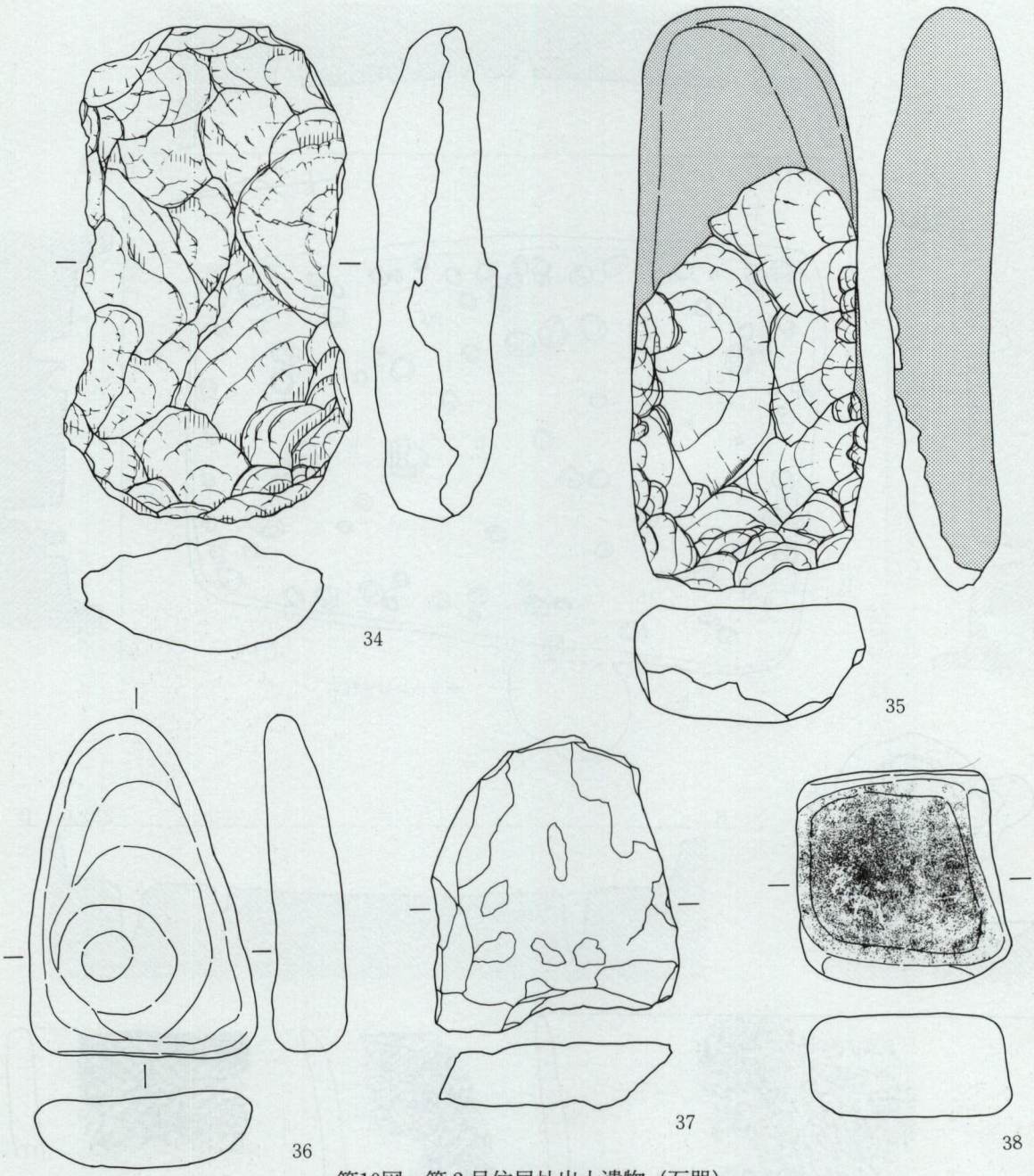


第８図　第２号住居址出土遺物（土器・石器）

１は４単位の波状口縁を呈する深鉢形土器。復元口径22.5cm、残存器高26cmを測る。寸胴気味の胴部より口縁が外反する。肥厚した口縁部に矢羽根状の刺切文を施し、刻み目を施す２本の隆帯で口縁部と胴部を区画する。地文は回転絡条体の一種と考えられる。２は波状を呈する口縁部片で施文は回転絡条体の一種と考えられる。３も４単位の波状を呈すると考えられる深鉢形土器。すぼまり気味の胴部下半よりハの字状に外半する口縁部に移行する。地文は２条による結節回転を羽状に充塡する。４は格子状

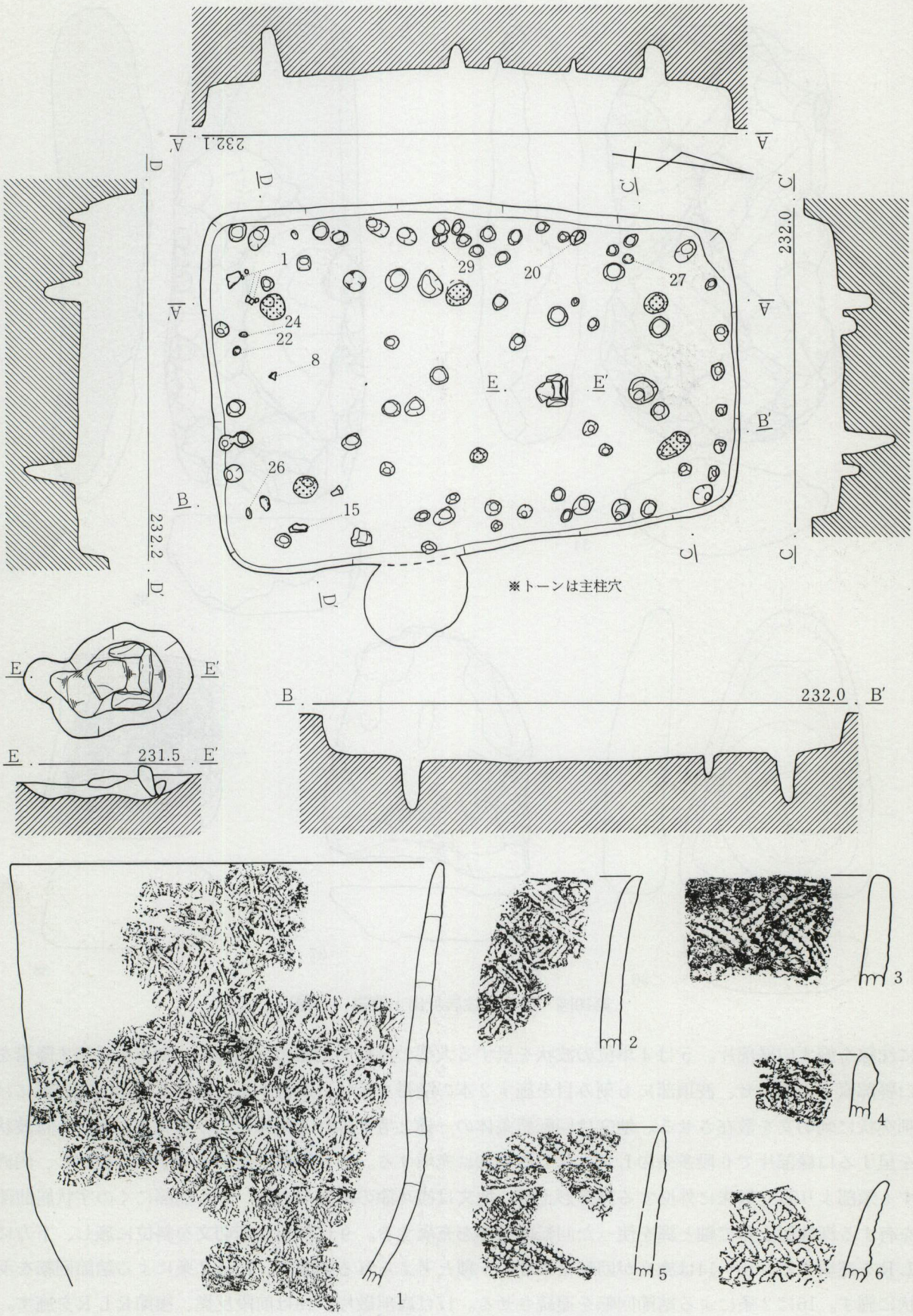


第9図　第2号住居址出土遺物（石器）



第10図　第２号住居址出土遺物（石器）

に沈線を施す口縁部片。５は４単位の波状を呈する大型の深鉢形土器の口縁部片。刻み目を施す隆帯を口唇部直下に巡らせ、波頂部にも刻み目を施す２本の隆帯を舌状に貼付する。隆帯と波頂の空白部には刺突状に刺切文を散在させる。地文は回転絡条体の一種と考えられる原体により施文される。６は波状を呈する口縁部片で０段多条のＬＲ・ＲＬを羽状に充塡する。７は胴部下半がくの字状に屈曲し、内湾する頸部より直立気味に外反する深鉢形土器。地文は複々節の縄文である。８も胴部にくの字状屈曲部を有する深鉢形土器で軸と縄を使った回転絡条体を充塡する。９は鋭利な刺切文を斜位に施し、下方にＬＲを充塡する。10～14は施文が回転絡条体の一種と考えられる胴部片。15は２条による結節回転を羽状に施す。16は２条による結節回転を連続させる。17は底部破片。18は前段反撚、複節ＲＬＲを施す。20はＲＬ・ＬＲを羽状に施す。21は底部破片でやや上げ底気味である。



第11図　第３号住居址平・断面図及び出土遺物（土器）

出土遺物・石器（第８～10図）

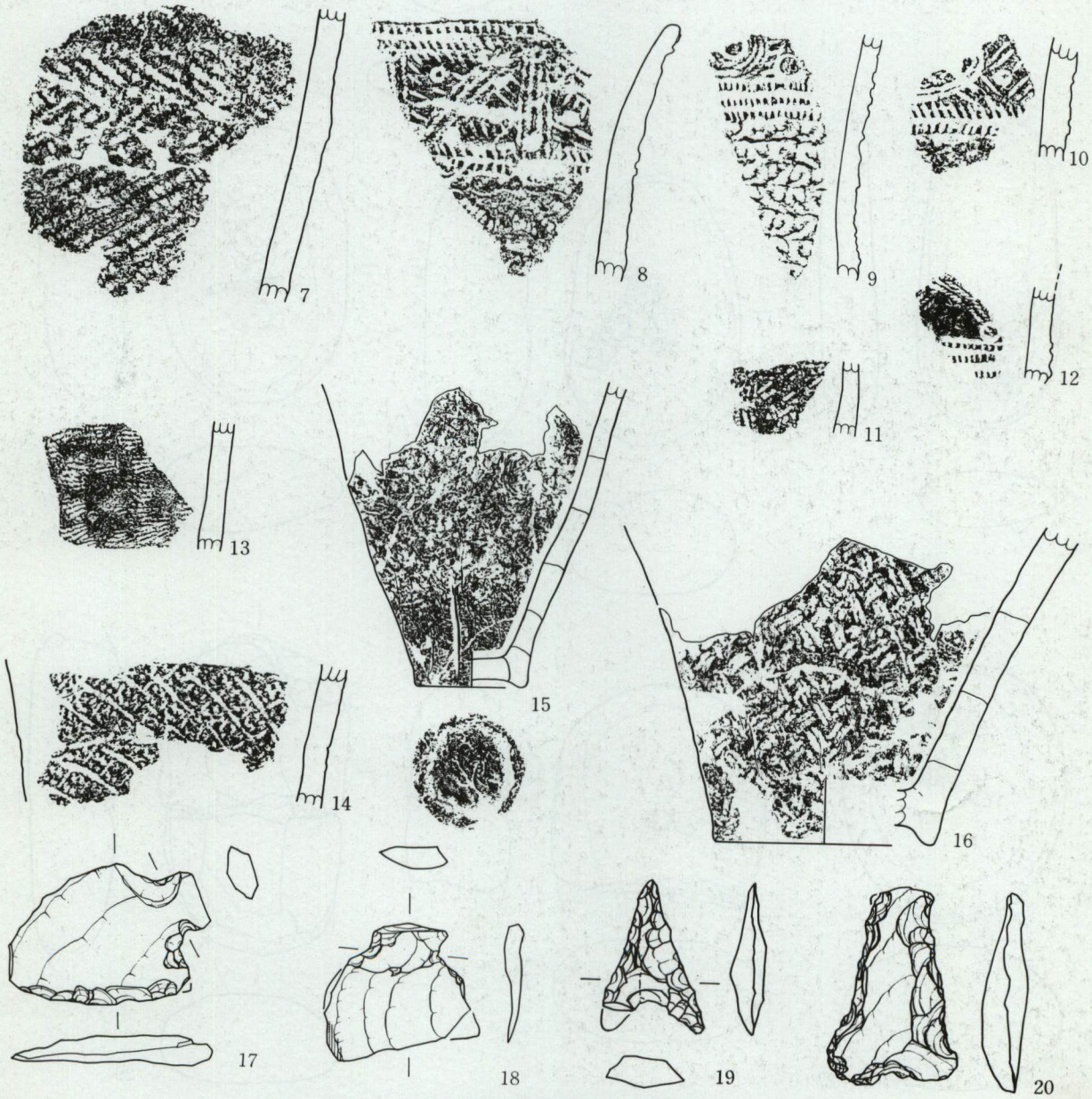
石器は石錐１点、横長石匙１点、基部を欠く石斧１点、凹石・磨石９点、大型の石斧１点、剝離面を有する石器１点、石皿２点、敲打痕の確認できる石１点を図示した。

第３節　第３号住居址

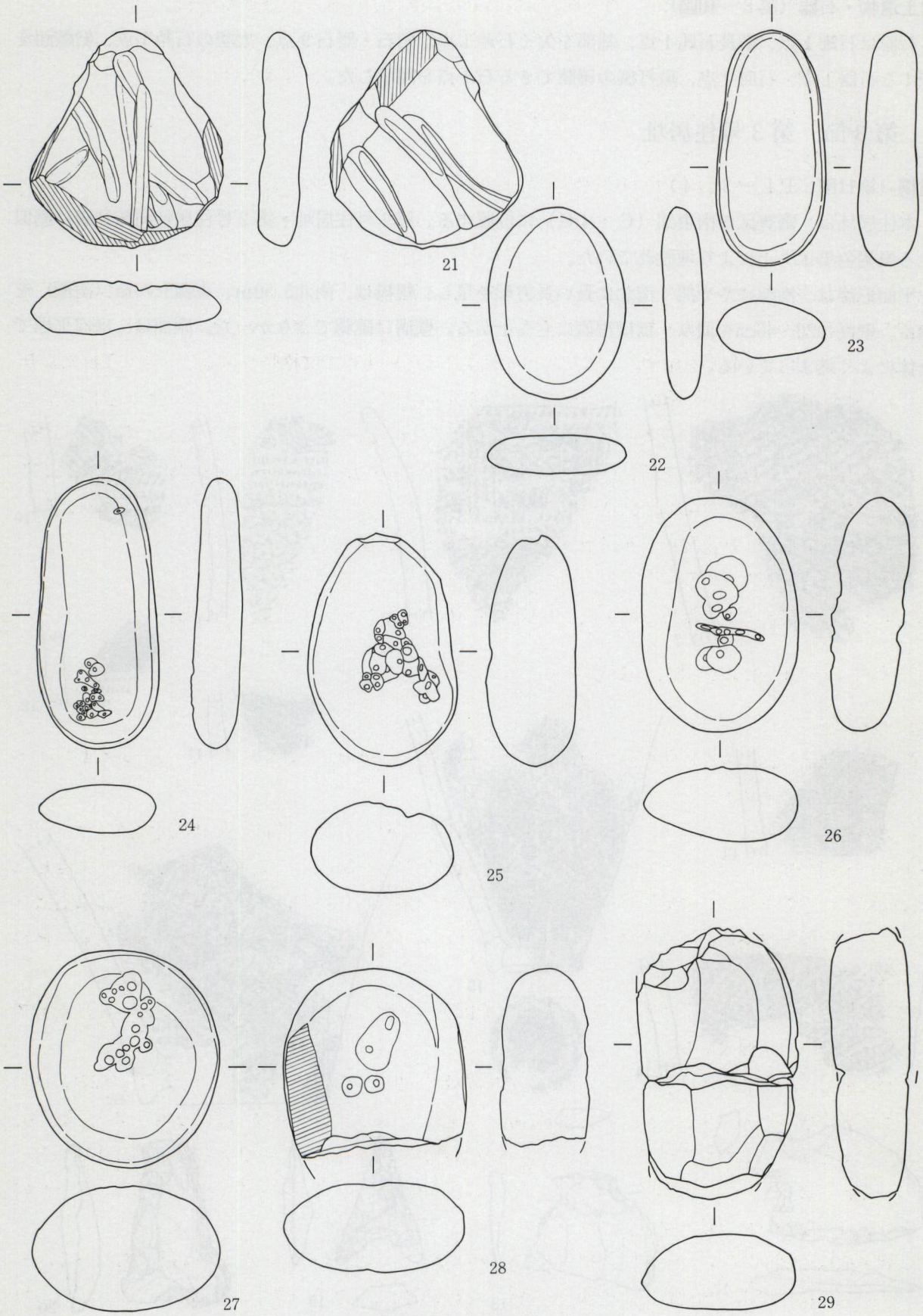
遺構（第11図、ＰＬ－３、４）

本住居址は、調査区の南東部（Ｃ－４Ｇ）に位置する。第１号住居址・第２号住居址同様Ⅱ層に酷似する黒褐色黒ボク土により埋設れていた。

平面形態は、南部にやや開く南北に長い長方形を呈し、規模は、南北5.50m、東西3.70m（南壁）を測る。壁高は26～46cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦で全体によく締まっている。



第12図　第３号住居址出土遺物（土器・石器）



第13図　第３号住居址出土遺物（石器）

ピットは75本確認されており、６本主柱穴と思われる。また、壁柱穴も確認できる。

炉址は、中央やや北よりで検出され、石組炉である。偏平な石を１個敷き周囲を３個の石でコの字状に組み南方を開放する。炉址及び周辺の焼土の分布は散在的で被熱の程度は低い。

本住居址からの遺物の出土は、全体的に少ない。

出土遺物・土器（第11，12図）

１は胴部の屈曲部と口縁部の径がほぼ同じ深鉢形土器で回転絡条体の一種と考えられる施文が充塡される。２も施文が回転絡条体の一種と考えられる口縁部片。３はＬＲ・ＲＬを施す。４は肥厚口縁を呈し、０段多条のＬＲを施す。５はＬＲと０段多条のＬＲを羽状に施す。６は波状を呈する口縁部片で２条による結節回転を羽状に施す。７はＲＬ・ＬＲを羽状に施す胴部片。８は刻み目を施す２本の隆帯で文様帯を上下に区画し、区画内を撚糸圧痕で三角形文を連続させる。三角文の空白部には円形刺突文と刺切文を施す。地文はＬＲを施す。９は刻み目を施す３本の細隆帯で文様帯を区画し、撚糸圧痕により蕨手状文や刺切文で文様帯を構成する。地文は０段多条の閉端環付きでＲＬ・ＬＲを羽状に多段施文する。10も刻み目を施す２本の細隆帯で文様を区画し、文様帯は撚糸圧痕による蕨手状文や刺切文・円形刺突文を施す。11と13は貝殻背圧痕を施す胴部片。12は刻み目を施す細隆帯や円形刺突文・撚糸圧痕文で文様を構成する。14は絡条体。15は附加条ＬＲ＋１本附加を施す。15と16は底部片で周縁が高まり、上げ底状を呈する。16は施文が回転絡条体の一種と考えられる底部片。

出土遺物・石器（第12，13図）

石器は、横長石匙１点、縦長石匙１点、凹基無茎の石鏃１点。石斧１点を図示した。

第４節　土坑及び集石遺構

遺構（第14図、ＰＬ－４）

第１号土坑は、調査区の北部（Ｆ－３Ｇ）に位置する。覆土は黒褐色の黒ボク土で、ロームの小ブロック・粒子を少量混入する。

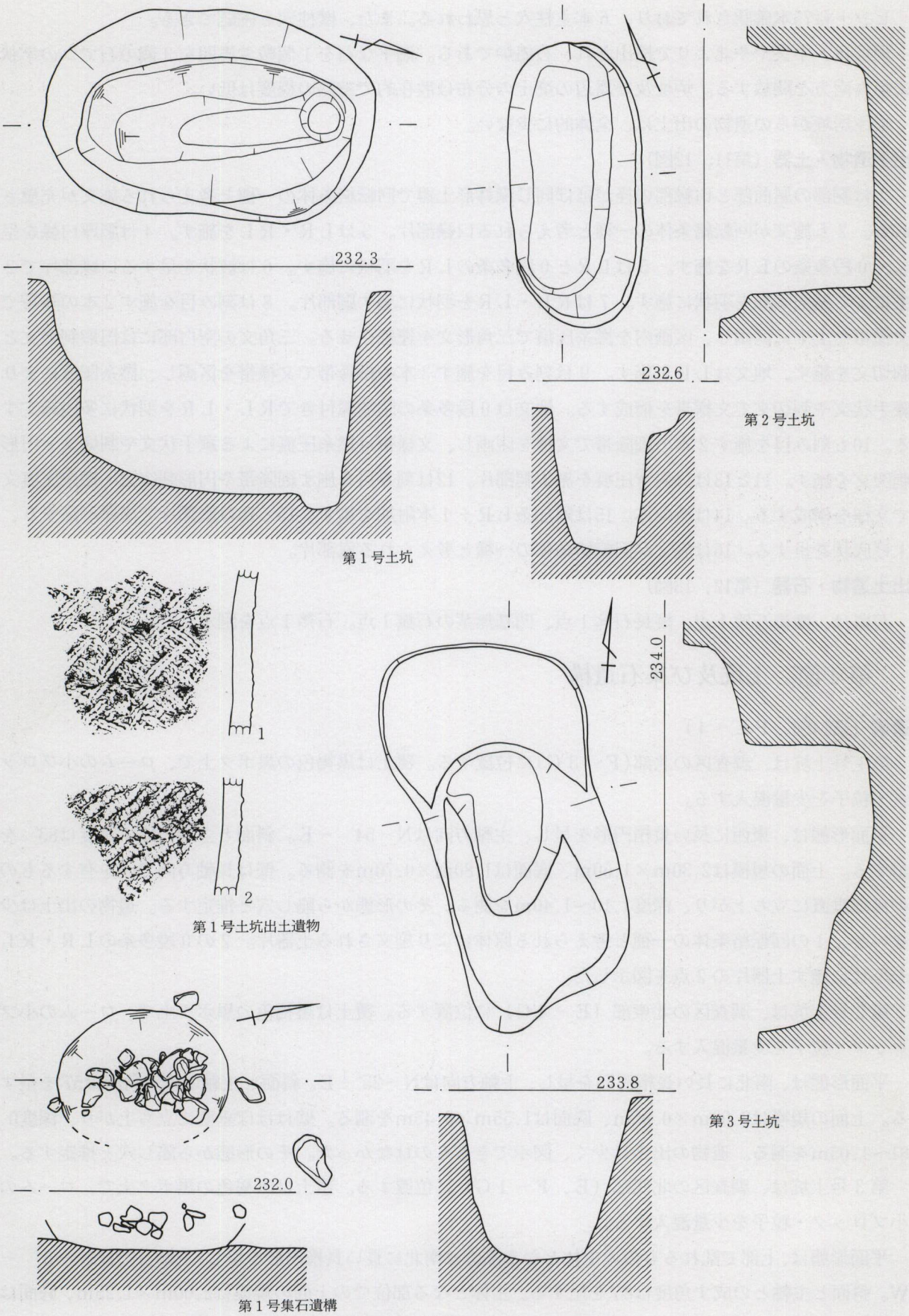
平面形態は、東西に長い長楕円形を呈し、主軸方向はＮ－54°－Ｅ。斜面と主軸の成す角度は83°を呈する。上面の規模は2.30m×1.50m、底面は1.80m×0.70mを測る。壁は長軸方向で段を有するもののほぼ垂直に立ち上がり、深度1.10～1.40mを測る。その形態から陥し穴と推定する。遺物の出土は少ないが、１の回転絡条体の一種と考えられる原体により施文される土器片。２の０段多条のＬＲ・ＲＬを羽状に施す土器片の２点を図示した。

第２号土坑は、調査区の北東部（Ｅ－４Ｇ）に位置する。覆土は黒褐色の黒ボク土で、ロームの小ブロック・粒子を少量混入する。

平面形態は、南北に長い長楕円形を呈し、主軸方向はＮ－25°－Ｅ。斜面と主軸の成す角度は57°を呈する。上面の規模は2.00m×0.95m、底面は1.55m×0.45mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度0.81～1.05mを測る。遺物の出土は少く、図示できるものはなかった。その形態から陥し穴と推定する。

第３号土坑は、調査区の北西部（Ｅ、Ｆ－１Ｇ）に位置する。覆土は黒褐色の黒ボク土で、ロームの小ブロック・粒子を少量混入する。

平面形態は、上部で乱れるものの主体となる部位は南北に長い長楕円形を呈し、主軸方向はＮ－５°－Ｗ。斜面と主軸との成す角度は85°を呈する。主体となる部位での上面の規模は2.00m×1.25m、底面は1.85m×0.95mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がりし、深度は0.41～0.84mを測る。遺物の出土は少な



第1号土坑

第2号土坑

第1号土坑出土遺物

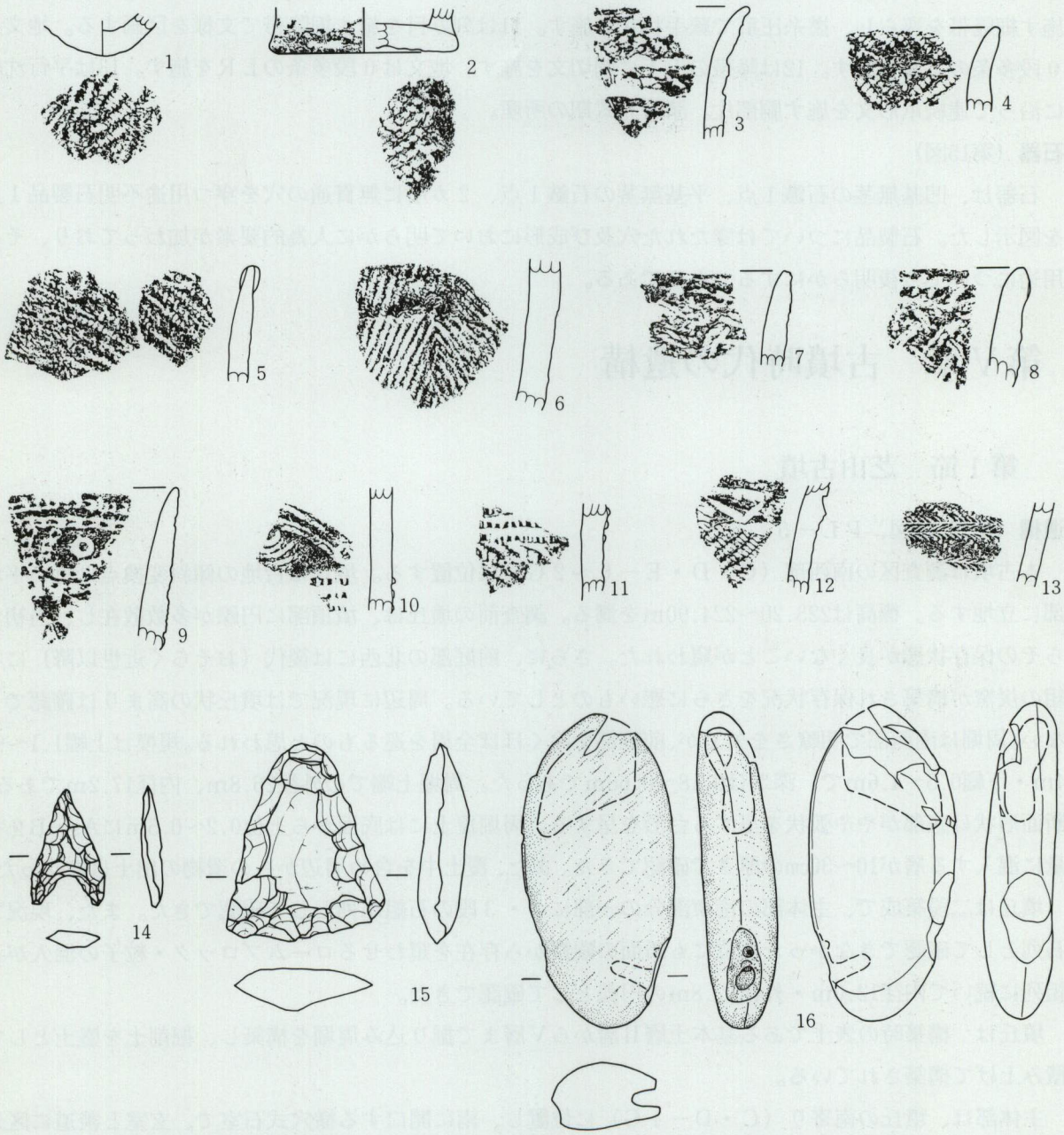
第3号土坑

第1号集石遺構

第14図　土坑・集石遺構平・断面図及び出土遺物

く、図示できるものはなかった。その形態から陥し穴と推定する。

第１号集石遺構は、調査区の東部、第３号住居址の北（Ｃ－４Ｇ）に位置する。確認面は住居址同様基本土層Ⅲ層を除去したローム面であるが、掘り込みは明確でなくⅤ層のハードな面まで掘り下げなければ確認できなかった。遺構は拳大～人頭大の円礫の集中と、浅い掘り込みを有する。円礫以外の出土遺物はなかった。



第15図　遺構外出土縄文時代遺物

第５節　遺構外出土縄文時代遺物

土器（第15図）

１は尖底を呈する底部片で０段多条のＬＲを施す。２は外底部にもＬＲＬを施す。３は器面が荒れているため原体は不明。４はＬＲ・ＲＬを羽状に施す口縁部片。５は口唇部を挟んで内外面に貼付文を施す。諸磯ｂ式期の所産であるう。６は０段多条のＬＲ・ＲＬで異方向縄文を施す。７と８は施文が回転絡条体の一種と考えられる口縁部片。９は円形刺突文や連続する刺突で蕨手状文を施す。10は刻み目を施す細隆帯を巡らし、撚糸圧痕で蕨手状文を施す。11は刻み目を施す細隆帯で文様を区画する。地文は０段多条のＬＲを施す。12は隆帯の上下に刺切文を施す。地文は０段多条のＬＲを施す。13は平行沈線に沿って連続爪形文を施す胴部片。諸磯ｂ式期の所産。

石器（第15図）

石器は、凹基無茎の石鏃１点、平基無茎の石鏃１点、２カ所に無貫通の穴を穿つ用途不明石製品１点を図示した。石製品については穿たれた穴及び成形において明らかに人為的要素が加わっており、その用途について今後明らかにするつもりである。

第Ⅴ章　古墳時代の遺構

第１節　芝山古墳

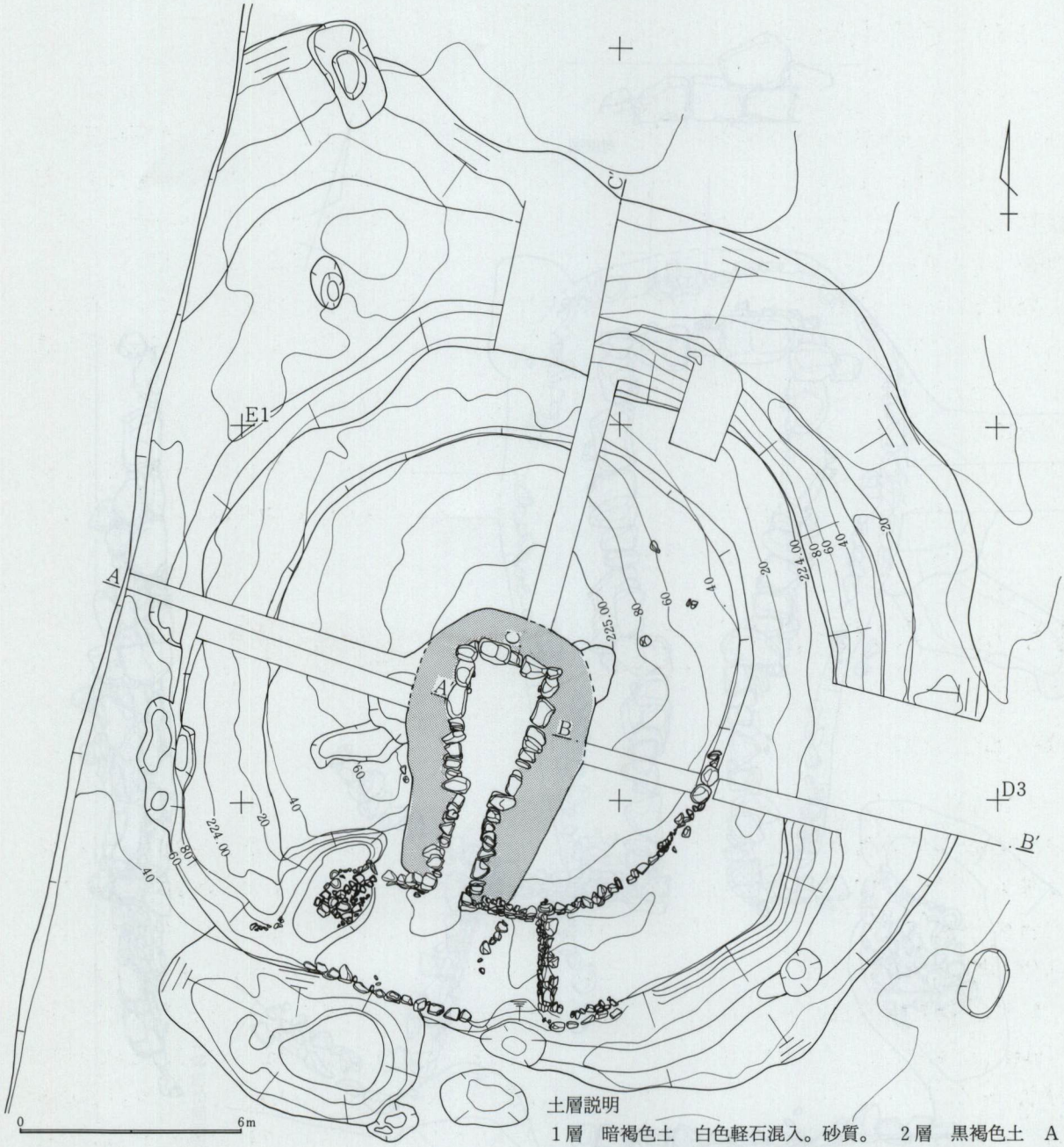
遺構（第16,17図、ＰＬ－５、６）

本古墳は調査区の南西部（Ｃ・Ｄ・Ｅ－０～２Ｇ）に位置する。墳丘は台地の傾斜変換点に近い平坦部に立地する。標高は223.20～224.90mを測る。調査前の墳丘は、墳頂部に円礫が多数散在し、当初からその保存状態が良くないことが窺われた。さらに、前庭部の北西には後代（おそらく近世以降）に石組の炭窯が構築され保存状況をさらに悪いものとしている。周辺に現況では墳丘状の高まりは確認できない。周堀は南西部で明瞭さを欠くが、前庭部を除くほぼ全周を巡るものと思われる。規模は上幅1.1～9.4m・下幅0.5～4.6mで、深さは0.18～0.66mであった。周堀上端での外径26.8m、内径17.2mである。断面形状は底部がやや弧状を呈する台形を呈する。周堀覆土には底面から上位0.2～0.5mにAs—Bを多量に混入する層が10～30cmの厚さで確認できた。また、覆土中を含め周辺からの遺物の出土はなかった。

墳丘は二段築成で、主体部の南東部分の一部に２・３段の石組が列として確認できた。また、現況で石列として確認できなかった部位にも断面の観察から存在を窺わせるロームブロック・粒子の混入が石組列に続いて内径12.0m・外径12.8mの円弧として確認できた。

墳丘は　構築時の表土である基本土層Ⅱ層からⅤ層まで掘り込み周堀を構築し、掘削土を盛土として積み上げて構築されている。

主体部は、墳丘の南寄り（Ｃ・Ｄ－１Ｇ）に位置し、南に開口する横穴式石室で、玄室と羨道に区分される。天井石はすでに失われていた。石室の形状は羽子板状を呈する両袖型石室で開口方位Ｓ－18°—Ｗである。構築は自然石の乱石積を基本とするが、羨門両脇に粗粒安山岩の切石を一対確認できた。また切石は、崩壊散乱した石群の中からも１点出土している。玄室床面は、やや堅緻であったが遺物等の出土の皆無とも相まって構築時に石等の被覆があったかは不明である。羨門に閉塞が施されていた。閉塞



土層説明

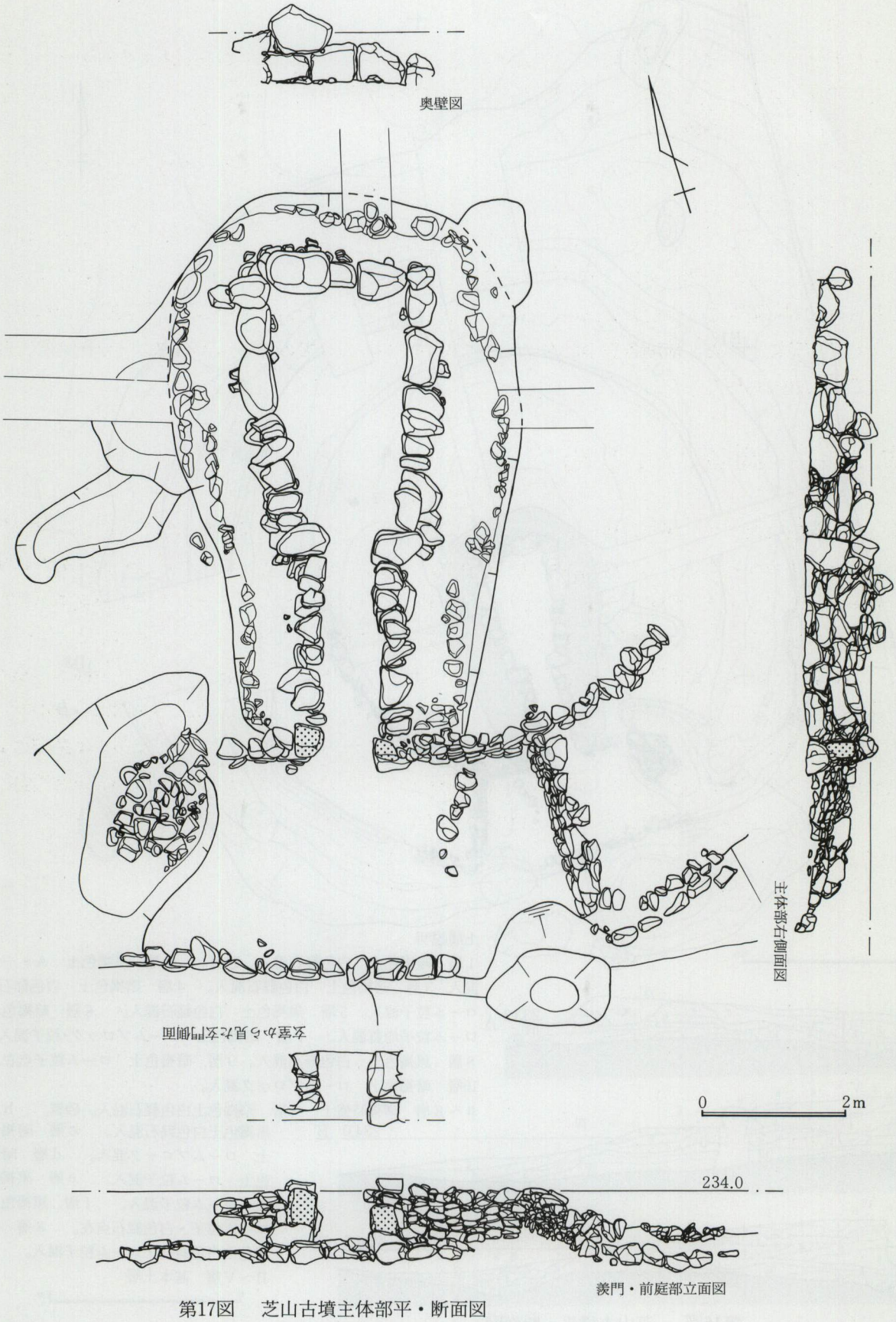
1層　暗褐色土　白色軽石混入。砂質。　2層　黒褐色土　As－B混入。3層　暗褐色土　白色軽石混入。　4層　暗褐色土　白色軽石・ローム粒子混入。5層　黒褐色土　白色軽石混入。　6層　暗褐色土　ローム粒子均質混入。　7層　暗褐色土　ロームブロック・粒子混入。8層　黒褐色土　白色軽石混入。9層　暗褐色土　ローム粒子点在。10層　暗褐色土　ロームブロック混入。

a～g層　構築時盛土　a層　暗褐色土白色軽石混入。砂質。　b層　黒褐色土白色軽石混入。　c層　暗褐色土　ロームブロック混入。　d層　暗褐色土　ローム粒子混入。　e層　黒褐色土　ローム粒子混入。　f層　黒褐色土　ローム粒子・白色軽石点在。　g層　暗褐色土白色軽石・ローム粒子混入。

II～V層　基本土層

0　4m

第16図　芝山古墳平・断面図



第17図　芝山古墳主体部平・断面図

は自然石を小口に積み上げていた。羨道部においても床面の状況は玄室と同様で構築時の状況は把握できなかった。

石室の掘り方は歪んだ楕円形を呈し、長軸長8.0m、短軸長4.2mを測る。石室石組の裏込めは、人頭大程度の円礫を寄せ掛け詰め込むとともに目潰し砂利を詰めて被覆を行っているが、やや雑な詰め方をしており空隙がかなり確認できた。

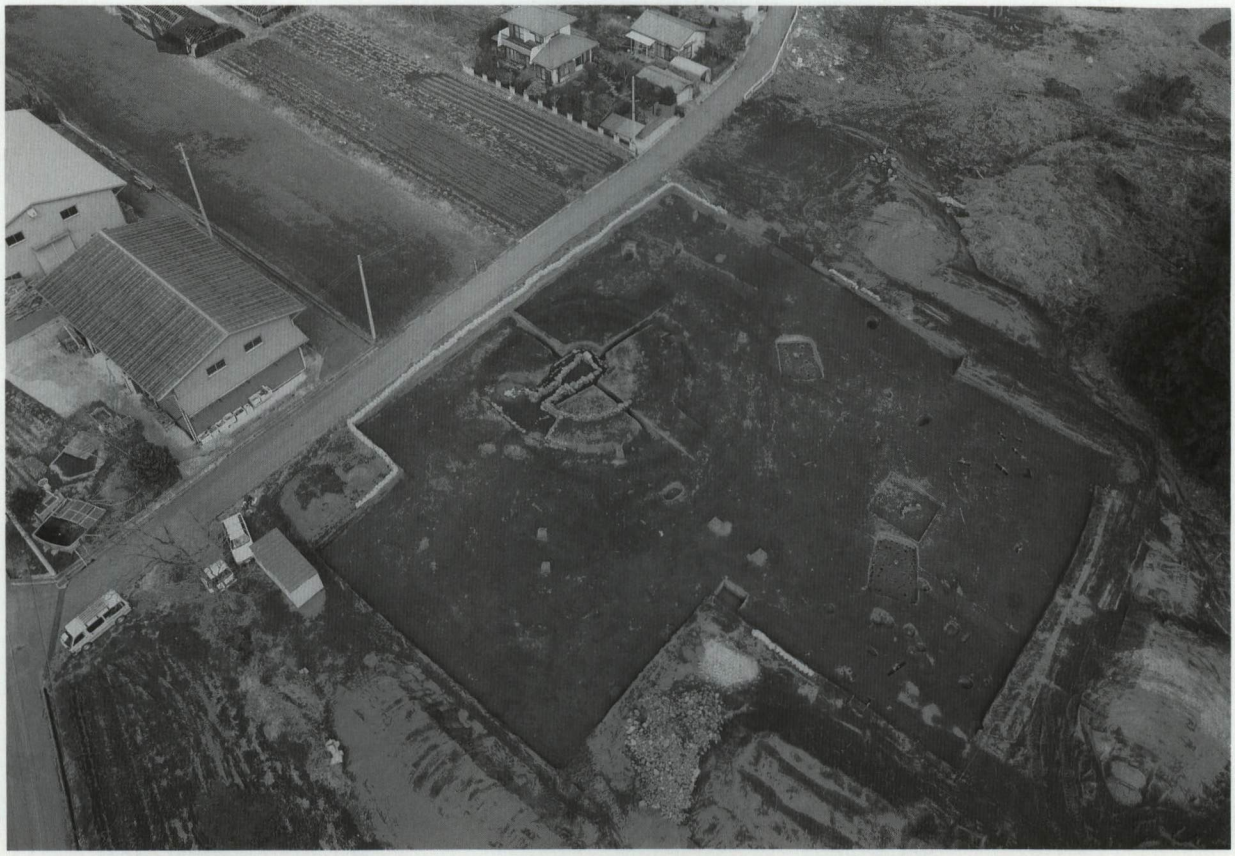
石室各部の計測値は、石室全長6.60m・玄室長3.25m・玄室奥幅1.85m・玄室前幅1.20m・羨道長3.35m・羨道幅0.80mを測る。

前庭部は、西部を後代の炭窯構築により破壊されているが、石室寄りを短辺とする台形を呈する平坦面を構築する。奥部と東部は自然石の石組が確認できる。(西部も同様に石組か？)この奥からは墳丘の二段築成の石組に連なる。手前は自然石の石列が区画を成し周堀の内径に連なる。この部位において自然石の石組が確認できた。前庭各部の計測値は左右対称であるとしての推定値で奥幅5.60m・前幅7.20m・奥行き3.00mを測る。

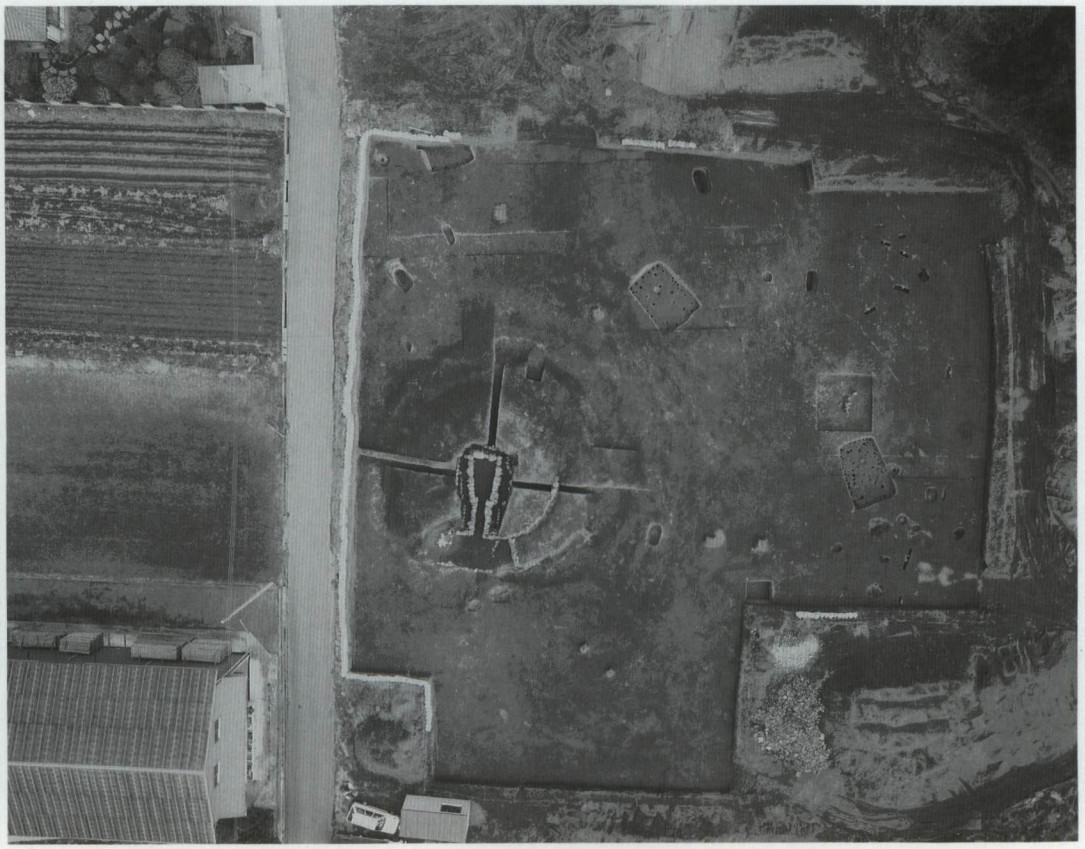
第VI章　調査のまとめ

本遺跡の調査において、縄文時代の竪穴住居址３軒、土坑（陥し穴）３基、集石遺構１基、古墳時代の横穴式石室を有する古墳１基が検出された。残念ながら古墳については、盗掘等により遺構の保存状態は良好といえず、出土遺物もなかったことから、充分な成果が得られなかった。ただ、前庭部が比較的良好に残され、石室の一部に切石の使用が認められ終末期における古墳の造営の一端が窺えた。

縄文時代については、３軒というそれも１軒は完掘できなかったという状況のなかで、遺構から出土した遺物が、検出例の少ない前期前葉の二ツ木式の段階に比定できるもので、今後当該期の遺跡の有りようを考えるうえで良好な資料の一つとなった。また、縄文時代前期初頭花積下層式期から当該期における資料は、大胡町では近年県営ほ場整備事業の実施に伴う発掘調査において、本遺跡のほか２遺跡で出土しており、それらの資料とあわせて、今後の大きな課題となろう。



調査区俯瞰（南東から）



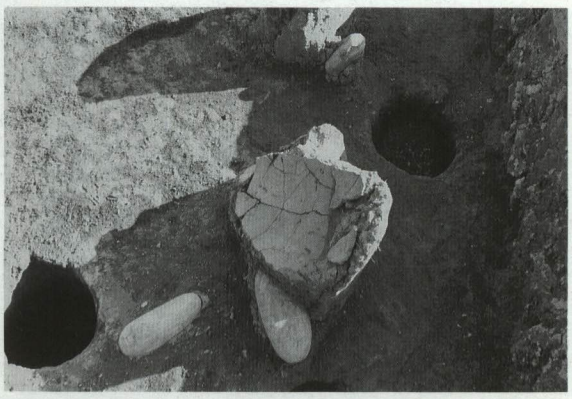
調査区全景（真上から）

第１号住居址

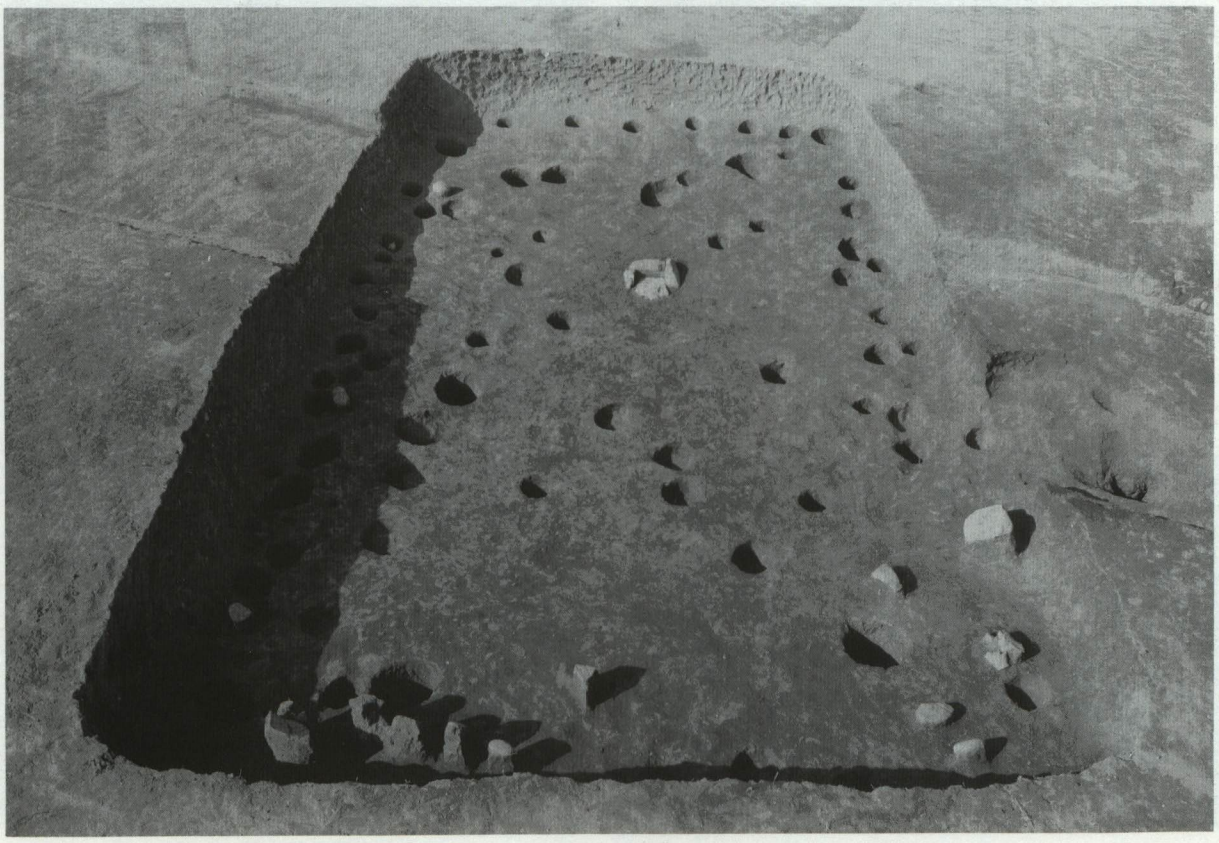
第１号住居址遺物出土状況

第２号住居址

第2号住居址炉

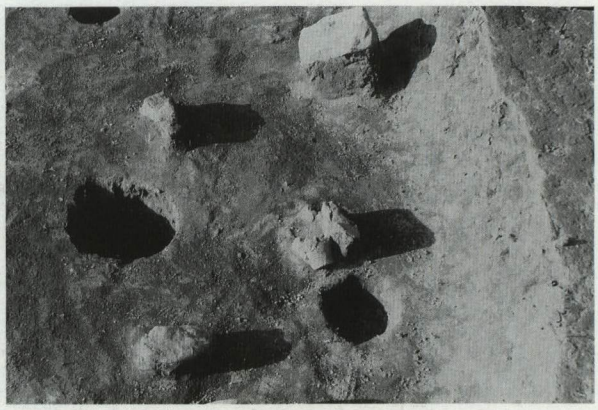


第2号住居址遺物出土状況



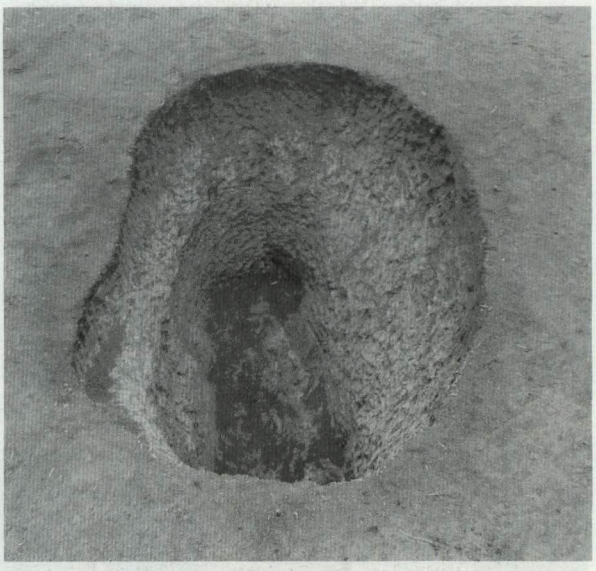
第3号住居址

第３号住居址炉

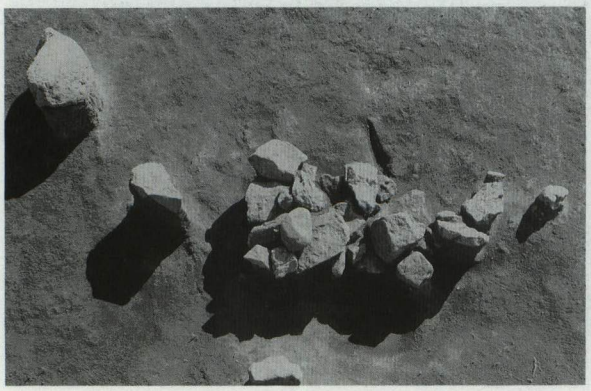


第３号住居址遺物出土状況

第１号土坑

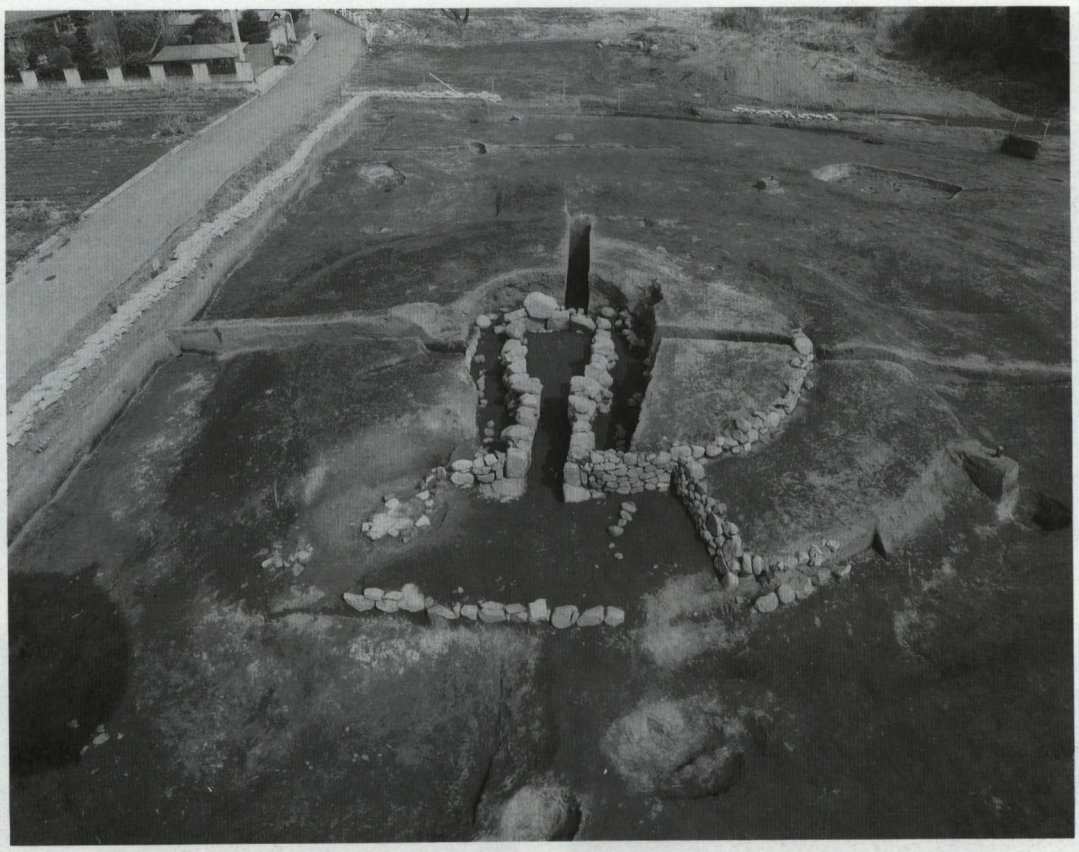


第２号土坑



第１号集石遺構

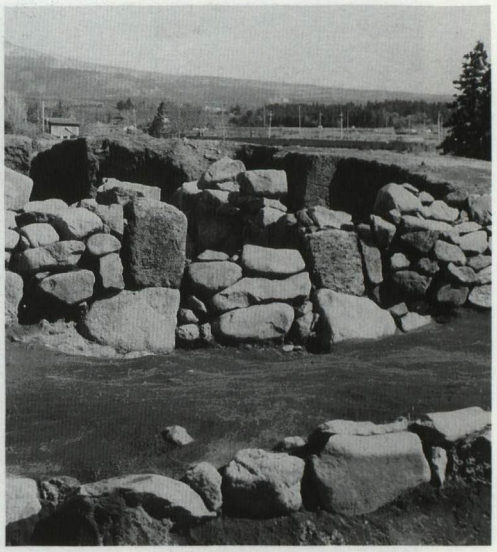
第３号土坑



芝山古墳俯瞰（南から）

芝山古墳全景（真上から）

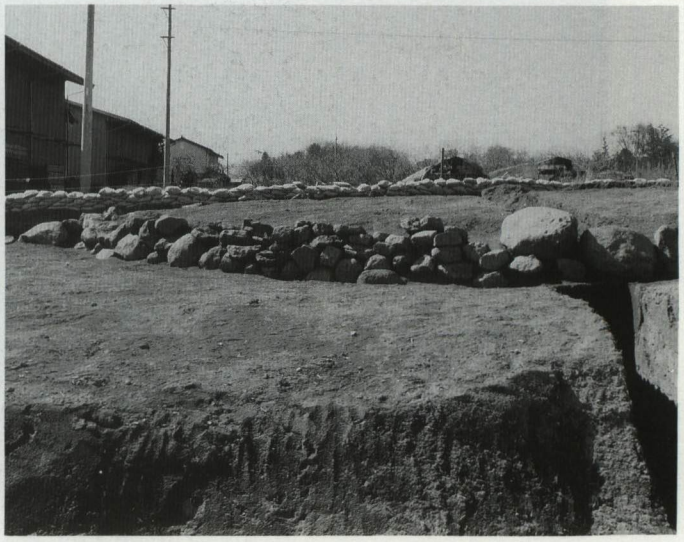
羨門・前庭部石組状況



羨門閉塞状況

前庭部石組状況

石室石組状況



墳丘２段築成石組状況

堀越芝山遺跡

「大胡町総合運動公園」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成8年3月29日発行

編　集　群馬県勢多郡大胡町教育委員会

発　行　群馬県勢多郡大胡町教育委員会
〒371-02　群馬県勢多郡大胡町堀越1115
Tel　0272（83）1111

印刷製本　朝日印刷工業株式会社

© 1996　Printed in Japan